

【講演会等報告】

東アジア人類学会について

林美枝子

東アジア人類学会 (East Asian Anthropological Association 以下 EAAA) は 2008 年に創設された新しい学会で、中国、香港、台湾、韓国、日本の 5 つの国や地域の持ち回りで大会が毎年開催され、2016 年の大会は北海道大学での開催が予定されている。2015 年 12 月発刊の『文化人類学』80-3 に、2014 年から常任理事会の日本代表理事を務めている沼崎一郎東北大学大学院文学研究科教授が、EAAA 設立の経緯や会の特徴を詳細に説明しているが、本学会員向けに改めてこの場で紹介する。

EAAA の学会費は無料であるが、大会参加には参加料が発生することもある。2014 年の韓国では研究発表を行う場合 50 ドル、2015 年の台湾は無料であった。毎回テーマに沿った分科会と個人発表を 5 月頃に募集するが、2016 年 10 月 15 日、16 日開催の大会テーマは、Culture, For or Against?: Thirty Years after “Writing Culture”である。(https://eaaconf.wordpress.com/ 2016 年 2 月 19 日閲覧)

筆者は 2014 年の韓国大会、翌年の台湾大会で在宅死の看取りについて発表をしたが、その時の参加体験を少し述べさせてもらおう。

日本文化人類学会の山本真鳥元会長から、初めて参加した韓国大会で、「楽しくて、参加が癖になる」といわれたが、確かに翌年の台湾では 2 回目の参加であるにもかかわらず、何人もの研究者とその再会を筆者は喜ぶことになった。国内学会では、地域の顔見知りや同じ大学の関係者が群れることが多いが、ここでは個人として皆参加しているため、誰とでも何の隔てもなく交流することが容易となる。また、参加が癖になりそうなもう 1 つの理由が、多くの若い研究者と知り合う機会が豊富な点であろう。沼崎氏は EAAA の小規模な親密性は「大学院生や若手などの研究者が気楽に発表できる場を提供する役割も果たしている」と指摘していた (沼崎 2015:471)。

使用言語は英語であるが、ほとんどの参加者にとって英語は母国語ではなく、発音の悪さはお互い様である。質問の返答に語学力不足から窮していると、会場にいる他の参加者が助け舟を出してくれるというのどかな風景は、国際学会では珍しいのではないだろうか。



2014 年韓国大会 Post-Conference Tour での記念写真  
(写真の掲載は EAAA2014 事務局より許可)

筆者は韓国でも台湾でも、他の参加者同様、何らかの公的な宿泊施設の提供を受け、極めて安価に宿泊が適った。格安航空を利用すれば東アジア圏内なので安い旅費で移動ができる。しかも 2016 年は札幌での開催であるから、北海道民族学会の会員には参加の好機であろう。

(はやし・みえこ／日本医療大学)